中国社会文化学会　２０２２年度大会

2022 年 7 月 9 日（土）自由論題研究報告
オンライン開催

第Ⅰ会場：14:00～16:30

司会：伊東　貴之（国際日本文化研究センター）

王安石の命と如来蔵　……田村　有見恵(東京都公立学校教員)
コメンテーター: 土屋　太祐（新潟大学）

宋代士大夫間の茶を媒介とする交流文化　……王　世禎（大阪市立大学大学院生）
コメンテーター: 大木　康（東京大学）

南宋四川宣撫使・四川制置使研究――安丙と余玠を事例として
……劉　藍蔚（大阪市立大学大学院生）
コメンテーター: 小林　晃（熊本大学）

第Ⅱ会場：14:00～15:40

司会：川島　真（東京大学）

郭建英と中国新感覚派について――『新郎的感想』と『建英漫画集』を中心に
……冉　念周（一橋大学大学院生）
コメンテーター: 伊藤　徳也（東京大学）

1947～1952年の「方言文学論争」における文体論的な問題……賈　海涛（一橋大学大学院生）
コメンテーター: 村田雄二郎（同志社大学）

会員総会：17:00～17:30　オンライン開催

2022 年 7 月 10 日（日）

シンポジウム　近代メディアは中国社会に何をもたらしたのか？

共催：科研費基盤研究 A「中国の改革開放萌芽期の再検討――メディア空間からみた旧東欧との分岐」
（研究代表者:中村　元哉）

オンライン開催　10:00～16:30

総合司会・企画趣旨説明：中村　元哉（東京大学）

午前の部：10:00～12:00

1.清末・民国期の近代メディアと中国社会――梁啓超、戈公振、黄天鵬による「報」の歩みを語る試み
……森川　裕貫(関西学院大学)
2.民国・人民共和国期の近代メディアと中国社会――東単事件（1946 年）をめぐる中国メディア
…… 水羽　信男（広島大学）

コメンテーター:上原　究一(東京大学)

午後の部：13:15～16:30

3.ラジオ・レコードと中国社会――The China Press（上海）の記事を中心に
…… 孫　安石（神奈川大学）
4.映画と中国社会――映画観客と国民の創出　…… 菅原　慶乃（関西大学）
5.書籍と中国社会――焚書と読書のシンボリズム　…… 比護 遙(京都大学大学院生)
6.SNS「We Chat」と中国社会――娯楽としてのチャリティ空間の拡大
…… 佐藤　千歳（北海商科大学）

主催：中国社会文化学会

◆自由論題研究報告 7月9日（土）第Ⅰ会場：14:00～16:30　オンライン開催

◇王安石の命と如来蔵　　**田村有見恵**

〔報告要旨〕王安石の新学は道学の興りとも深く関係するにもかかわらず、それがどのような学説であったのかについては依然として不明な点が多い。王安石の著書に『楞厳経解』、『金剛経注』、『維摩詰経注』、『華厳経解』、『老子注』、『荘子解』があったことからも、多くの道学者とは異なり、仏教や老荘思想を融合する立場であったことがうかがえる。特に仏典の注釈書として唯一現存する『楞厳経解』には、如来蔵、仏性、本覚明心、我、無我の説が見える。

王安石の命の学説については、筆者は先に「王安石の「一」の「性命之理」」という論文で、万人は天から均しく同一の完全な命を受けているが、現実では不完全な状態であるため修養により本来の完全な命に到達させるという説を王安石が提唱していたことを指摘した。本発表ではその王安石の命の学説とそれ以前の儒学の注疏の説との差異点、如来蔵思想や『大乗起信論』の本覚、不覚の説との関係を検討する。

〔報告者紹介〕田村有見恵（たむら・ゆみえ）、1982年生。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（文学）。現在東京都公立学校・教諭。主要論文「司馬光「心」学考―王安石「性命之理」学との対立から―」（早稲田大学大学院文学研究科博士論文、2020年），「王安石の「一」の「性命之理」」（『日本儒教学会報』5，2021年）など。

◇宋代士大夫間の茶を媒介とする交流文化　　**王　世禎**

〔報告要旨〕本報告では宋代士大夫における贈答品応酬文化における「交流」について考察を試みている。具体的には、贈答品の品別傾向と交流の場面、交流者の種別を分析し、宋代人がどのような交流の場面において贈答を行うかを分析した。宋代の贈物の種類は豊富であり、実用品から趣味・愛好品、嗜好品までを含んでいる。贈物の種類は交流の「場面」や交流相手の身分・階層と深く関わってくる。これらの交流場面と交流相手に対する分析を通じて、当時の士大夫が交流の「場面」や相手に応じて、贈答品を使い分けていた様子を見出すことができる。また同時に、「茶会」、「闘茶」など交遊において特記される茶文化に対しても詳しい分析を試みた。「茶会」、「闘茶」においても参加する人物と場面によって茶会の交流内容が変容することが判明した。以上の分析によって、茶が士大夫間を繋ぐ媒介機能を有しながら宋代の社会文化生活、とりわけプライベートな交流の面で果たした重要な役割が明らかになってきた。

〔報告者紹介〕王世禎（おう・せてい）、1991年生。専攻は宋代社会文化史。現在大阪公立大学大学院文学研究科後期博士課程在学。主要論文「宋代茶館研究の現状と課題」（『人文研究』第69巻，2018年），「南宋臨安茶館的形態及其分布」（『人文研究』第72巻，2021年），「从宋代士大夫的書信与贈答詩看贈茶文化」（『都市文化研究』第24号，2022年）など。

◇南宋四川宣撫使・四川制置使研究――安丙と余玠を事例として　　**劉　藍蔚**

〔報告要旨〕本報告では、四川宣撫使（四川制置大使）の安丙と四川制置使の余玠を事例として、考察を行う。安丙は四川の多くの人に愛され、生祠が設立された。彼が亡くなった後、理宗は沔州にある彼の祠堂に「英惠廟」の扁額を賜うとともに、彼に対しては「忠定」の諡を賜った。しかし、同じ四川制置使であり、四川の人に愛された余玠は中央における評価は安丙と全く異なっていた。彼は死後、館職の剥奪処分を受けており、中央における余玠の評価は極めて厳しいものであった。本報告では中央が両者に対して異なる態度を示した原因に焦点を当て、それを生み出した対外関係、戦局、政治抗争などの時代背景、中央と地方の人脈などに踏み込んで考察する。両者をめぐる詔、墓誌銘、行状、祭文、手紙、序、記、詩詞などの資料を用

いて、四川と中央の関係、四川社会のネットワーク構造を明らかにする。

〔報告者紹介〕劉藍蔚（りゅう・らんい）、1992 年生。専攻は東洋史。大阪市立大学大学院文学研究科修士課程修了。現在大阪公立大学大学院文学研究科東洋史学専修後期博士課程在学。主要論文として「宋代四川的先賢祠与先賢祭祀」(『大阪市立大学東洋史論叢』第 19 号、2019 年 9 月)、「宋代的生祠研究—以四川为中心」(『都市文化研究』第 23 号、2021 年 3 月)、「南宋四川制置使、宣撫使研究—以中央與地方的評價為線索」(『人文研究』第 73 巻、2022 年 3 月）など。

◆自由論題研究報告 7 月 9 日（土）第Ⅱ会場：14:00～15:40　　オンライン開催

◇郭建英と中国新感覚派について——『新郎的感想』と『建英漫画集』を中心に　　冉 念周

〔報告要旨〕本報告のねらいは郭建英（1907-1979）の翻訳集『新郎的感想』及び漫画集『建英漫画集』と中国新感覚派作家の作品との関連性を考察することである。

郭建英は 1920、30 年代に上海で活躍した漫画家として知られており、その経歴から中国「新感覚派」と近い人物だとされているが、作品上の具体的な関連性についてはまだ明らかにされていない。『新郎的感想』(1929)には横光利一の「花婿の感想」、「火の点いた煙草」、「妻」、「園」が収められており、『建英漫画集』（1934）は 1920 年代後半から 1934 年までの郭建英の漫画作品を収録している。本報告は『新郎的感想』と穆時英の「被當作消遣品的男子」との重なりに加え、穆時英及び劉吶鷗の作品と『建英漫画集』の内容との間に見出される相関関係を、主にそこで描かれている男女関係に即して考察する。

〔報告者紹介〕冉念周（ぜん・ねんしゅう）、1994 年生。専攻は 1920、30 年代の中国モダニズム文学。現在一橋大学大学院言語社会研究科博士課程在学。主要論文「方法としての借用 ： 穆時英の作品における池谷信三郎の「橋」について」(『言語社会』15、一橋大学言語社会研究科、2021 年 3 月)。

◇1947～1952 年の「方言文学論争」における文体論的な問題　　賈　海涛

〔報告要旨〕本報告は 1940 年代末から 50 年代初めにかけての「方言文学」をめぐる中国現代文学史上の重要な論争を踏まえ、その論争において取り上げられた「平易な白話文〔中国語：浅近白話文〕」、「純粋な方言文学〔中国語：純粋的方言文学〕」、「叙言分離」といった文体論的な諸概念は、いかに文芸の大衆化、民族共通語の普及等のイデオロギー的な言説に規定されていたのかを考察したい。また、40 年代末と 50 年代初めという二段階の方言文学論争の歴史的な経緯を整理しつつ、その中の文体論にまつわる認識、そしてそれにともない「方言文学」の中身がいかに歴史的に変容しているかに対して焦点を当てることにしたい。その二段階の論争をそれぞれ比較的独立した事件として論述した既存の先行研究とやや異なり、本研究は論争間において文体的な概念の名称が変わったとしても、その内在的な実質は連続していたことを重要視する。

〔報告者紹介〕賈海涛（か・かいとう）、1993 年生。専攻は文学言語、当代上海文学、都市空間論。華東師範大学中文系卒。現在一橋大学言語社会研究科博士課程在学。主要論文は、「工人新村経験与居住空間透視--従挿図看『繁花』」（『海南師範大学学報』、2019 年第 3 期）、「場所の記憶と原風景——二十一世紀の変わり目の文学表象から見る蘇州河西段」（『言語社会』第 14 号、2020 年）など。

シンポジウム
近代メディアは中国社会に何をもたらしたのか？

2022 年 7 月 10 日(日) 10:00～16:30　オンライン開催

企画の趣旨

中国社会は、様々な近代なるものを経て現在に至っている。私たちは、この歴史的経緯をどう評価するにせよ、過去から現在の中国社会を読み解く際にその経緯を無視できない。そのなかでも、新聞・雑誌・ラジオ・レコード・映画などから成る近代メディアは、20 世紀全体の中国社会に対して広範な影響力をもったと考えられる。

明清期までの伝統社会には、豊かな出版文化がすでに育まれていた（本学会 2017 年度シンポジウム「中国近世の出版と社会」参照）。書籍の流通によって成熟しつつあった伝統社会は、既存の出版文化を基盤にして近代メディアを受容した結果、新しい価値観や新しい思考・行動様式をどのように生み出し、従来の何を残しながらどう変化していったのだろうか。

これまでも近代メディアが 20 世紀中国においてどのように発展し、どのような役割を果たしてきたのかは、盛んに論じられてきた。とりわけ、政治権力と関連づけながらメディア空間の拡大や大衆化の意味を検討した研究は、一定のボリュームをともなって存在している。そこでは、権力を行使する側が近代メディアをしばしばコントロールしようとしてきたにもかかわらず、商業ベースのメディアも含めて、なぜその空間がしたたかに拡大し、時に権力批判の場としても機能したのか、あるいは、近代メディアを介した大衆化が個人の解放と政治による動員という二面性をもつことをどう統一的に把握するのかが、かなり実証的に論じられてきた。

しかし、結局のところ、近代メディアが中国社会に何をもたらしたのかは、いまだ一定の知見を得られていない。そのため、この点について、中国の社会と文化に関心をもつ研究者が一堂に会して率直な意見交換をしてもいいのではないか。そうすれば、伝統社会とのつながりを過度に重視する議論、近代の経験を過度に重視する議論、そのどちらも軽視して現代の情報技術（IT・AI 化など）による変化のみを重視する議論は、いずれも中和されるのではないか。そのような期待を込めて、本シンポジウムを企画することにした。

なお、本シンポジウムは、科研 A（代表・中村元哉）「中国の改革開放萌芽期の再検討――メディア空間からみた旧東欧との分岐」との共催になることも申し添えておきたい。

報告要旨

午前の部：10:00～12:00

清末・民国期の近代メディアと中国社会――梁啓超、戈公振、黄天鵬による「報」の歩みを語る試み

森川　裕貫（関西学院大学）

本シンポジウムの企画の趣旨は、「これまでも近代メディアが 20 世紀中国においてどのように発展し、どのような役割を果たしてきたのかは、盛んに論じられてきた」とし、優れた成果が上げられてきた事実を重視する一方、「しかし、結局のところ、近代メディアが中国社会に何をもたらしたのかは、いまだ一定の知見を得られていない」という大きな問題点の存在も指摘している。本報告では、清末にすでに開始されていた中国における「報」の歩み・歴史の語られ方に、こうした問題点をもたらす原因の一端が潜んでいるとの見通しをまずは提示したい。具体的には、梁啓超（1873-1929 年）、戈公振（1890-1935 年）、黄天鵬（1909-1982 年）という三人の人物による「報」の歩みに関する語りに着目し、その特徴を明らかにする。併せて、彼らがそのなかで、「報」と社会との関わりをどのように捉えていたのかについても議論したい。

民国・人民共和国期の近代メディアと中国社会――東単事件（1946 年）をめぐる中国メディア

水羽　信男（広島大学）

通史的にいえば、1946 年のクリスマスイブに北京市の中心部・東単で起こった米兵による中国人女子学生へのレイプ事件は、多くの市民の反米感情を強め、米国に対して従属的な態度をとると判断された国民政府の支持基盤を掘り崩してゆく。こうして東単事件は、中国共産党の軍事的な勝利を導く世論の形成過程において、重要な転機の一つとなったと理解される。だが当時、政府系のメディアも活発な反ソ連・反共産主義の宣伝を展開しており、民国期におけるメディアと中国社会との関係を考察するうえで、この東単事件をめぐる報道についての再検討は、今日でも必須である。また 2004 年に廈門大学の謝泳が、新たに公開され米国側資料に基づき、東単事件に関する再検討の必要性を説いて以後、この事件はインターネット上を含め、改めて中国の論壇で着目されることになった。その意味では人民共和国時代のメディアについて考えるうえでも、東単事件は好個の検討課題となろう。

午後の部：13:15～16:30

ラジオ・レコードと中国社会――The China Press（上海）の記事を中心に

孫　安石（神奈川大学）

１9 世紀末から 20 世紀の初頭にかけて新たな文明の利器が登場したことに多くの人々は歓声を挙げた。人々は、鉄道、船舶、自動車という新たな交通手段を手に入れ、その行動範囲は、以前とは比べものにならないほど拡大した。また、現代の日常生活に欠かすことのできない電気、写真、レコード、電話、ラジオなどが出揃ったのもこの時代であった。

本報告は、これらの文明の利器のうち、特に、レコードとラジオ放送の登場が中国社会にもたらした変化がいかなるものであるのか、について新たな知見を紹介するものである。中国におけるレコードとラジオ放送については、既に貴志俊彦のほか編『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』（勉誠出版、2015 年）が刊行され、中国を含む東アジアにおいてラジオ放送が戦争との関連から発展してゆく過程が論じられている。

そこで、今回の報告では若干視点をかえ、上海で発行された英字新聞 *The China Press* の記事（1920 年代～1930 年代）を通して、欧米の人が伝える中国社会とラジオ放送の内容がいかなるものであったのか、ついて紹介したい。ちなみに、*The China Press* は Kellogg‘s Switchboard and Supply Company とともに上海にてラジオ放送局 KRC を運営していた。*The China Press* は、中国のラジオ放送について果たして何を、どのように報道していたのだろうか。

映画と中国社会――映画観客と国民の創出　　**菅原　慶乃（関西大学）**

本報告では、映画が 20 世紀の中国における国民形成に与えた影響を主に映画鑑賞と映画観客の側から再考し、その史的意義について議論したい。

映画は中国への伝来直後より娯楽としてのみならず西洋の近代知を伝える知的なメディアとしても受容されたが、20 世紀初頭には通俗教育の実践やナショナリズムの涵養にも資する有用な工具として重視されるようになった。他方、映画鑑賞という経験は、伝統的な集団秩序とは異なる方法で多様な出自の人びとを近代的・進歩的な集団として均質化した。たとえば、鑑賞マナーを遵守することは、ある種の映画的演出が観客に惹起させる激しい情動を理性で制御しうるような「文明化」された観客の姿を実態化した。また、映画を「正しく」理解するための多様な形態の映画説明が普及し、映画を「理解する」ことに重きを置く観客文化も深化した。こうして創出された映画観客という「想像の共同体」は、中華人民共和国の映画工作においても理想的な観客像として引き継がれ、より広汎な観客に映画を「正しく」理解させるためのさまざまな手法と工夫が制度化されていった。

書籍と中国社会――焚書と読書のシンボリズム　　**比護　遙（京都大学大学院生）**

第二次世界大戦以降、前近代的な野蛮の象徴としての焚書を、近代的な文明の象徴としての読書と対置することにより、専制主義を批判することが一般的になった。現在の共産党政権下の中国に対しても、西側のメディアではしばしば「本を焼く」イメージが強調されている。ただ、その側面にのみとらわれるならば、中国もまた、日本やアメリカなどの他者の焚書を批判しつつ、自らを読書する国として自己規定してきたことは見落とされることになる。書籍は古代から中国にあるとはいえ、それを「読む」ことの意味は近代に入ってからさまざまに再想像されてきた。本報告は、1930 年代から現在に至るまでの中国の言説空間において、焚書と読書の行為がいかに表象されてきたかを概観することを通して、近代メディアとしての書籍に対する認識を確認することにしたい。とりわけ、空前絶後のベストセラーである『毛沢東語録』を生み出した文化大革命の時期を中心として、その前後の連続性と断絶に着目する。

SNS「We Chat」と中国社会――娯楽としてのチャリティ空間の拡大　　**佐藤　千歳（北海商科大学）**

中国のインターネット空間は、2010 年代からのソーシャルネットワーキングサービス（SNS）の普及によって質的な変化を遂げた。その代表例は深圳市の IT 大手「テンセント（騰訊）」社が運営する SNS アプリ「WeChat（微信）」でみられた公益空間の拡大である。WeChat が決済機能を搭載した 2013 年以降、WeChat を通じた民間公益団体への寄付は急増した。テンセント社が、公益活動のプラットフォームを WeChat 上に開設したことにより、公益民間団体（NPO）は主流社会に対して自身の団体の活動を紹介する場を得た。現在は、推計１億人以上のユーザーが、電子決済を通じて日常的に寄付を行っているとされる（李妍炎『下から構築される中国　中国的市民社会のリアリティ』2018 年、明石書店）。中国はまた、利用者が世界最多のインターネット大国であり、インターネットの社会活動への応用を進める「インターネットプラス」の社会実験で世界を先導している。「インターネット公益」は、インターネットプラスの一部ともなっている。本報告では、IT 企業が経済活動と公益活動の融合を推進する実態を示す。そのうえで、民間による公益活動が、「共同富裕」などの共産党政権のスローガンも取り込みながら、インターネットのプラットフォームにおいて娯楽産業と融合し、新たな公共空間を形成した過程を示したい。

［シンポジウム登壇者紹介］

◇森川　裕貫（もりかわ・ひろき）

関西学院大学文学部教授。専門は中国近現代史。主要な業績に『政論家の矜持――中華民国時期における章士釗と張東蓀の政治思想』（勁草書房、2015 年）、『中国近代の巨人とその著作――曾国藩、蔣介石、毛沢東』（共著、研文出版、2019 年）など。

◇水羽　信男（みずは・のぶお）

1960 年生まれ。広島大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。現在、広島大学大学院人間社会科学研究科教授。主要業績に「毛沢東の統一戦線論：1935～1937 年を中心として」（石川禎浩編『毛沢東に関する人文学的研究』京都大学人文科学研究所付属現代中国研究センター、2020 年所収）、「今堀誠二の中国史研究と核兵器反対運動：1945 年前後を中心に」（『アジア社会文化研究』23 号、2022 年）などがある。

◇上原　究一（うえはら・きゅういち）

東京大学東洋文化研究所准教授。1980 年東京都生まれ。2013 年東京大学大学院博士課程単位取得退学、博士（文 学）。主な論文に「明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について」（『東方学』131、2016 年）、「明末における「章回」小説の定着と商業出版」（『中国―社会と文化』33、2018 年）、「明末清初の坊刻における江西の位置付けについて」（藤本幸夫編『書物・印刷・本屋――日中韓をめぐる本の文化史』勉誠出版、2021 年）など。

◇孫　安石（SON Ansuk）

韓国ソウル生まれ。東京大学大学院博士課程修了、博士（学術）、神奈川大学外国語学部教授。専門：中国近代史、上海都市史、日中関係史。共編：『明治から昭和の中国人日本留学の諸相 』（東方書店、2022 年）、『上海モダン「良友」画報の世界』（勉誠出版、2018 年）、『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』（勉誠出版、2015 年）、『近代中国都市案内集成 上海編』（監修・解説、2012 年）など。

◇菅原　慶乃（すがわら・よしの）

専門は中国語圏映画史。関西大学教授。著書に『映画館のなかの近代―映画観客の上海史』（単著、晃洋書房、2019 年）、*Early Film Culture in Hong Kong, Taiwan, and Republican China: Kaleidoscopic Histories*（分担執筆、University of Michigan Press, 2018）．論文に「男装するモダンガール―映画『化身姑娘』シリーズと女性観客」『アジア遊学』第 267 号（2022 年）。

◇比護　遙（ひご・はるか）

京都女子大学非常勤講師、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員(DC1)。専門は中国の読書史、メディア史。訳書にトーマス・S・マラニー『チャイニーズ・タイプライター：漢字と技術の近代史』（中央公論新社、2021 年）、主要論文に「抗戦期中国の読書と動員：政治コミュニケーションから見る『読書生活』(1934-1936)」（『現代中国研究』第 45 号、2020 年）、「消費する読者への政治的期待：1930 年代中国の読書雑誌を手掛かりに」（『マス・コミュニケーション研究』第 98 号、2021 年）など。

◇佐藤　千歳（さとう・ちとせ）

1974 年生まれ。北海商科大学商学部教授。社会学、中国地域研究。2000―13 年、北海道新聞記者。2005―06 年、中国共産党機関紙「人民日報」傘下の「人民網」にて、交換記者として同紙日本語版ニュースの編集に従事。2010―13 年、北海道新聞北京支局長。2013 年から現職。主な著書に「権威主義体制下の中国におけるキリスト教徒の生存戦略と政教関係」（櫻井義秀編著『アジアの公共宗教』2020 年、北海道大学出版会）、「基督教信仰和残障児童教育」（対華援助協会『中国法律与宗教観察』第 11 巻 2 号 2018 年）、『インターネットと中国共産党』（講談社、2009 年）など。